





第92号・2002(平成14)年12月

第23回「石橋湛山賞」特集

受賞記念講演

日本経済再生の条件

竹中流経済政策を論破せよ  
——植草一秀氏の人と業績

植草 一秀  
鈴木 淑夫

特集／「井出一太郎没後七年記念シンポジウム」

いま、石橋湛山、三木武夫を語る

田中秀征・國弘正雄・早野透・井出孫六  
石橋湛山・三木武夫の水脈 増田 弘

〈初期〉東洋経済新報社の思想形成過程に関する考察

——J・S・ミルの自由概念の継承を中心に——

井坂 康志

論壇季評 戦前にも「隠密外交」の失態／古色蒼然、岡崎の外務官僚論／米国の新帝國主義めぐり、アイケンベリーと藤原と寺島と／竹中・木村、「アメリカ出羽の守」の迷走／「異端」の植草・岩田経済学に脚光／復古調の教育改革論、背景に「個人主義への嫌悪」

財团法人 石橋湛山記念財団

に内容がひどすぎる。しかしそれでもなんとなく進んでしまう。このままズルズル行くと戦前のようなになってしまい、というのもオーバーではあるが、やはりキリッとしていないとおかしくなってしまう、と思われる事態なのです。さてではどうすればいいのか、井出さんの提起に、すぐこれであるという名案がないのが残念です。

井出 今は政界の外にあっても、時代を見詰めてウォーミングアップは怠っていないと思われる田中さん、少しみんなが元気になる、喝になるようなお話を、最後に締めくくつてほしいのですが。

田中 石橋先生にとって戦後、行動人になってから不本意なことがたくさんあったと思う。公職追放（昭和二二年）など必要がない人だったが、それに吉田茂は立ちはだからなかつた。阻止しなかつた。結局、追放解除後（二六年）に吉田打倒に走って、戦犯として追放されていた人たちも含めた同志とともに、一九年に民主党をつくり、翌年に保守合同で自民党ができる。つまり不本意な流れに乗つて自民党結成に参画した、これは石橋先生にとって非常に残念なことだと思う。

それで昭和二年末、総理大臣になる。石田博英先生に聞いたことだが、閣僚が全部決まつて発表した後に、官邸の机で何か書いている。石田先生が何をしているかと聞いたら、「自分の理想とした、本当の内閣をつくつているんだ」と。当時私は高校一年だったが「石橋難産内閣」と言っていた。この組閣の時も非常に不本意

だった。それから國弘さんが言われた翌年一月二三日の辞任。この時のいきさつは非常に堂々としていて、まず真っ先にマスコミに病状を出した。やはり国民に対する責任感が非常に強かつた。後継者として外務大臣である岸さんを選んだことは、ご本人が選んだのだから言えないが、恐らくはもう痛恨の極みだったと私は思う。

吉田総理は、私が戦後尊敬している人の一人だが、やはりあの昭和二〇年代後半、戦後の国々の進路、国の体制、社会のあり方を決め、つくり上げて行く時に、石橋湛山先生が追放されていたことは非常に残念でならない。あの時代に石橋先生が指揮していたならば、その後の保守党の流れも、石橋先生を引き継いだ流れも変わつただろうと考える。

ただ、石橋先生から岸さんに引き継いだ時代というのは、やはり「岸さんの時代」ではなかつたかと、最近思う。冷戦の非常にすさまじい時代であつて、戦前の石橋思想には冷戦を想定していない。だからむしろ、九〇年代に入って冷戦が終わつた世界を考えるのに、これ以上寄与する、いろいろ参考にできる思想はないと思う。冷戦が終わつた今こそ、石橋先生の思想、考え方を見直していくかないといけない。私の常任理事国問題に対する意見も、小日本主義という石橋思想から影響を受けている。石橋先生の背伸びをしない、内容本位という姿勢は、本当に見直さないといけないと思うのです。

井出 長時間どうもありがとうございました。

## 「初期」東洋経済新報社の思想形成過程に関する考察（上）

### —— J. S. ミルの自由概念の継承を中心にして ——

井坂 康志  
やす いさか

東洋経済新報社出版局

#### 1 序

明治初期において、イギリス流の自由主義思想が日本に与えた影響にははかり知れないものがある。なかでも最大級の評価に値するのは、スペンサーと並ぶイギリスの思想家 J. S. ミルであろう。

ミルの生涯における業績は、哲学、論理学、経済学、政治理論等多岐に渡つてゐるが、なかでも、『自由論』『功利主義論』は、ミル思想の核心をなす世界史的な著作であつて、近代自由主義思想の金字塔をなすものである。彼は『自由論』で、少数者の意見の尊重と言論の自由が真理に近づく最良の方法であることを力説してゐる。また、『功利主義論』においては、自由・平等の位置づけに踏み込み、人間による能力の最大限の開花を提唱してゐる。いずれもミルの主要著作で

あり、日本の近代化に多大な影響を与えたことが知られている。本論では、主として上記の二作、特に『自由論』を手がかりにして、『初期』東洋経済新報社（以下「東洋経済」）の言論の基礎に横たわるミル思想を検討する。

その際、ミル思想と日本をつなぐ重要な人物として、天野為之に注目する。天野は、J. S. ミル『経済学原理』（訳書名『高等経済原論』）、『自由論』（訳書名『自由之理』）などの訳業で知られ、明治期の経済学界に大きな足跡を残した人物である。彼は自らがすぐれた学者・ジャーナリストであつただけでなく、創業者・町田忠治を継いで二代目の東洋経済新報社を経営した人物でもあつた。彼の思想が大体において自由主義に属することは、彼が上記の書を翻訳したことからも推測しうる。本論では、天野のミル研究者としての功績、および天野を触媒として形成された『初期』東洋経済の言論

思想、なかでも一九一〇年に天野の直弟子・三浦誠太郎を中心へに発刊された『東洋時論』における、石橋湛山の論説に焦点を当てて、ミル思想の系譜の追跡を試みる。

なお、本論で扱う初期とは、一八九五(明治二八)年の『東洋経済新報』発刊から一九一〇(明治四五)年までを意味する。一九一一年を一つの区切りとした理由には、第二代主幹・天野為之の直弟子、植松孝昭、三浦誠太郎らが刊行した『東洋時論』の廃刊がある。後に詳しく見るよう、『東洋経済新報』が從来の経済的自由主義を一貫して掲げていたなかで、『東洋時論』は発言領域を経済から一步踏みだし、政治的自由主義の旗印を高く掲げるにいたっている。『東洋時論』自身は一年あまりというきわめて短命な雑誌であったが、後に華々しく展開される帝国主義批判等の個性的言論の基礎をここに見ることができる。したがって、この雑誌の終焉をもつて便利的に一つの区切りとしたのである。

## 2 ミルと明治初期の知識人

### 2-1 明治期におけるミル思想の受容

日本が近代社会へ大転換をとげた明治維新以降、新しい國家を担う知識人たちの主たる野心は、日本の独立をどう維持していくかにあつたといつてよい。そのため彼らは、西欧、特に英米の文明から学ぶことに努め、国家の強化と近代化への原理転換を推し進めた。とりわけ日本の進歩的知識人に大

大隈重信によって結党された。大隈は明治元年以来政府首脳の一員として財政運営に携わってきた。その彼が一夜にして主席参議の地位を追われ、政治の中核から退場させられたわけである。彼の新党結成については、内外からさまざまなものと測定があつたといふが、大隈の訃伝によると、彼の政党結成は自分年来の理想だったといふ。

明治初期におけるミルの思想は、幕末維新の知識人中心に大きな流れを形成し日本の近代化促進に大きな役割を果たした。そして、その理念の政治的な形態としての結果が立憲改進党の成立であったと見てさしつかえないだろう。

### 2-2 東京専門学校の天野為之

大隈による立憲改進党の結成と東京専門学校の設立(一八八二年)の関係は、一卵性双生児のよつなものといわれる。『早稲田大学百年史』には、学苑創立の功労者・高田早苗の次の文章が紹介されている。

「(大隈の下野で)世の中は一変して、其前から自由党と云ふもののが出来ていたが、続いて、秩序ある進歩即漸進といふことを標榜して改進党と云ふものを、小野梓其他の人々が大隈公爵を助けて組織することになった。其中に我々が学校を卒業したが政府の人となる事を好まぬと云ふことになつた時に、恰度現在文科の教室、此教室の半ばだけの建物が前から出来ていた。(略)大隈公爵と云ふ人は昔から教育に熱心な人で、

大きな影響を与えたのは、J·S·ミルの進歩的自由主義思想であった。

明六社の一人であつた中村敬太郎は、ミル存命中のイギリスに留学し、帰国後ミルの『On Liberty』を『自由之理』として一八七二年に翻訳している。また、同社会員であつた西周も『功利主義論』を翻訳し世に紹介している。明治初期の啓蒙思想家のなかで大きな影響力を持つた福沢諭吉もミルの思想から多大な影響を受け、ヨーロッパの実学を重んじ歴史の動きを決するものとして知徳の進歩を重視した。

ミル思想受容のありかたは、政治的な形態をとつて明確に現れたといえる。明六社のころまで官民一体の理想であつた立憲民主政体への改革の理想は、明治一七(一八八四)年の『民権議院設立建白書』を経て、時期尚早を説く政府側の意見と、即時実施を要求する民間側の意見に衝突が生じた。そして、西露戦争以降、自由民権運動も内部で分裂はじめめる。この時期の動きを大きくわかると、フランス唯物論に立つ人権思想と、ミルらのイギリス経験主義に立つ民主議論に分けられるようである。そして、両者の質的相違は、自由党と立憲改進党という政治的な形をとつて現れる。教科書的ないい方をするならば、自由党はルソー的であり急進主義を核としているのに対し、改進党はイギリス功利主義を核とし穏健な立場を代表していたといえる。

立憲改進党は、明治一四(一八八一)年の政变で下野した

佐賀に居られる時でも長崎に居られるときでも学校の世話を焼き、自ら教へられたこともある位の人で、(略)小野(梓)君が總て世話を焼くといふことから遂に此学校が出来た」

ここから、「進歩即漸進」というイギリス流自由思想が、大隈により政治・教育の両面で展開される萌芽を見て取ることができる。大隈は学校の生みの親であるが、ほかにも彼の思想に共鳴する多くの知識人たちが、その発展の基礎づくりに尽力することとなつた。彼らが大隈の意旨を受け取り、骨格を与えた肉を付け、具体的な形に整えていったといえる。その中心となつたのは、改進党参謀の小野梓であった。小野は一八七一年から七四年まで米英に留学し、世界的な広い視野と西歐的な自由と民主主義の思想を体得して帰国した。彼の活動は、司法官僚、ジャーナリスト、教育・研究者、党指導者と多岐にわたつており、民衆の立場から日本の近代化に寄与した人物である。

小野を中心として、参集した東京専門学校創設当初から活躍した人物に天野為之がいる。天野は小野と同じ東京帝国大学の八年後輩にあたり、在学中、フェノロサから功利主義に基づく経済学と哲学を学んだ。彼は在学中から小野の主催する研究会鷗渡会のメンバーとなり、これが縁で卒業後直ちに立憲改進党に入党、大隈、小野の片腕として活躍することになる。天野は、東京専門学校で主に政治学、憲法、経済学を講じた。しかし、開設当初から、その担当科目は経済原論、貿易論な

ど経済を中心あつたようである。東京専門学校発足時の課程表を見ると、すでに「ミル氏代議政体論」「ミル氏自由論」「ミル氏經濟論」のはか、スペンサー、ベンサム、マコヒー等、イギリスの進歩的自由思想家の名が多く並んでゐる。

では、天野の東京専門学校初期における講義と思想はどのようなものだったのだろうか。

彼の受け持つた科目には、哲学、文明史、読み方などがあり、比較的幅広いけれども、常に彼の担当だったのは経済学であった。主としてミルの原理により、大学時代に読んだ書物を参考にして講義を進めたとい<sup>(8)</sup>う。後に東洋経済新報社から発行される『経済学要綱』で知られるように、彼の関心領域は経済分野に絞られていった。その要因に彼の基礎となる思想があつたと考えられる。天野は、人類の目的を私利にあると考えた。私利とはいわゆる利己心のみによるものではなく、功利と同義である。私利を行為の基準として、彼の経済理論を構築していった。すなわち、ベンサム、ミルの功利主義論を相述することによつたのである。これも、彼のミル思想に対する深い造詣によるところを見ても差し支えないだろう。

本節の最後に、天野の講義態度について、若干補足しておこう。当時の時代状況も大いに関係していると考えられるが、彼の講義はいたって謙揚なものであつたようだ。天野自身は自分の講義を次のよううに述懐している。

「毎日の講義がいつも不足で、一時間のうちを四十分も

あると種切れとなり、此のよつたなことが度々あつたから生徒には笑はれ、支障があるからこれで止めると云ても種が尽きたのだと感付て信じなかつたのです

また、高等教育を受ける学生の少なかつた時代もあり、学生の受講態度は真剣そのものであつたのだろう。おそらく、天野自身の謙遜もあると思われるので、後の東洋経済主幹で、直接彼らから講義を受けた三浦鎮太郎の文章を見てみよう。

「先生が講義を終りて階段を降り切らぬ途中に、先生をつかまえて何かの問題を尋ねた場合のことである。話が簡単に片付けかぬのと松岡君の求めて巻まぬ態度に動かされて先生は遂に、当時惡路の泥下駄のままで出入せる汚れた階段に、腰を卸して尋々と教えられた」

先進的ジャーナリストとして真理探求に邁進した天野は、一学生の質問とはいってもゆるがせにはできなかつたのである。この文章から天野の真摯な態度だけでなく、当時の素朴な東京専門学校の有り様がわかつて興味深い。いずれにせよ、天野の鷹揚で温順な人柄と同時に、常に真剣で責任感ある態度をこれらから伺い知ることができる。

### 3 〈初期〉東洋経済とミル思想の継承

### 3-1 天野為之と東洋経済

天野の活動は、明治初期の知識人がおおむねそつあつたように、いくつかの領域に渡っている。天野の仕事として特

題の討究にあり、これらの活動を通じて世に経済知識を普及させることにあつたと考えられる。

では、より具体的に『東洋経済新報』における天野の主張はどのようなものだったのだろうか。天野が『東洋経済新報』を主宰したのは、日清戦争から日露戦争（一八九四—一九〇四年）までの約一〇年間であった。いわゆる産業資本確立の時期であつて、一方で帝国主義的傾向が現れはじめたころでもある。この時期には、金本位制採用、北清事變、日英同盟等、内外の難問が山積していた。天野は相次いで起る問題に対し、専門である経済学的見地から論陣を張つた。浅川・西田の研究によれば、天野の主張は大きく以下の九つであつた。<sup>25)</sup>

- (一) 金本位制の主張
  - (二) 外資導入に対する見解
  - (三) 取引所改革
  - (四) 勤儉貯蓄
  - (五) 経済学の普及
  - (六) 非保護貿易論
  - (七) 日露戦争に対する見解
  - (八) 地租増徴反対論
  - (九) 社会問題

以上に貫しているものは、功利主義の哲学と自由主義経済学原理による民間主導の資本蓄積であった。一步進んで考

えるならば、彼の専門であつた J·S·ミルの思想を日本という特殊解に適応したものとも見ることができる。当時の日本は、政府主導の経済発展が企図されていたものの、依然として資本の欠乏が最重要問題であった。天野はこの現状に、民間による勤勉と努力によってこの問題を克服すべきと考えたのであつた。

帝国主義的傾向に対する天野の見解も同様に興味深い。設立の初期から天野および『新報』は軍部に批判的だったことが、読み取れるためである。次のように軍部を痛罵しているのは象徴的であろう。

「陸海軍の幕僚は天下に憚る者なく、勝手存分の振舞を為し、軍事諸般の計画は只偏狭なる当局一流の寸法に置いて定め、嘗て國家の他の部分の活動、殊に一国財政経済との調和如何を顧るなし」

軍部の独走、政治・経済的不合理を観く批判する点は、後の石橋湛山による対支出兵批判を彷彿とさせる。石橋は満州事変時の軍部批判として、戦費の問題と政治的腐敗をあげた。ここから、天野による(初期)東洋経済の主張が、石橋の平和思想の基礎に影響していると考えることも、困難ではない。

付言するならば、『東洋経済新報』は日露戦争の時に主戦論を唱えることはなかつた。しかし、当時、明確な非戦論を唱えた内村鑑三や幸徳秋水とも異なつていたように思われる。内村や幸徳の思想的基礎が人道主義やキリスト教、社会主義

内原稿が多かつたためと、主幹・植松考昭の思い入れが強かつたためであろう。しかし、その植松が肺結核で死亡したのとほぼ同時に、後任の三浦鑑太郎は『東洋時論』の廃刊を決意した。一九一一年九月まで刊行され、わずか一年あまりの短命であつたにもかかわらず、『東洋時論』は明治期の言論界で異彩を放つてゐることは確かであろう。なぜなら、『新報』が從来の経済的自由主義を一貫して掲げていたことは言を待たないが、『東洋時論』は発言領域を経済から一步踏みだし、政治的自由主義の旗印を高く掲げるにいたつたためである。

『東洋時論』を主宰したのは、三浦鑑太郎であつた。先の植松も三浦も、東京専門学校時代には第二代主幹・天野為之の直弟子であつた。その意味で、彼らは学問・言論両者において天野の薰陶を直に受けた人物であり、天野を通じて自由思想のヴィタミンを注入された筆頭にあげられるべき存在であるといえよう。

三浦の主張は、政治・経済・社会いずれに偏することなく、バランスのとれたものであり、その内容は自由主義を基礎とする卓越した世界観に裏打ちされていた。彼は次のように述べている。

「政治上に於いては制限選挙を改めて普通選挙となし、産業上に於いては保護政策を撤して自由開放政策を打ち立て、対外政策に於いては帝国主義を擲て商工主義を奉し、国防政

によつているのに対し、天野の論調は功利主義的および自由主義的基礎に立つてゐる。その特徴はきわめて実践的である点に求められ、理念と行動は常に両輪として駆動している。この点が当時の天野および東洋経済の特質といえるだろう。

また、天野は彼が東京専門学校で指導した逸材を東洋経済新報社に入社させることによつて、人材面での基礎を築いていった。代表的な人物に、垣原正直(一八九七年)、植松考昭、松岡忠美(一八九七年)、伊藤正(一八九八年)、三浦鑑太郎(一八九九年)らがいる。彼ら東洋経済第一世代を形成する人材が、天野の教え子であつたことは注目に値する。なぜなら、彼らは天野の教えを受けただけでなく、大げさに言えば天野の世界観を東洋経済の論説に定着させ、発展の礎石をつくつたと推測してもさほど困難ではないためである。

### 3-2 自由思想の触媒としての『東洋時論』

以上、(初期)東洋経済の經營を中心に核となるイギリス自由主義思想の受容を概観してきた。では、東洋経済の思想はより具体的にはどのように現れたのだろうか。

一九一〇(明治四三)年五月、東洋経済は、社会・思想評論を中心とする月刊誌『東洋時論』を発行する。『東洋時論』は、論説中心の、当時にもいわゆる「硬い雑誌」であつて、売れ行きは当時の雑誌の採算点三〇〇〇部を下回り、經營は苦しかつたといふ。それでも発行が継続されたのは、社

策に於いては今日の過大を引締めて有効なる最小軍備主義に改め、教育上に於いては官学の特権を廢し、社会問題に於いては婦人及び労働者を現下の窮屈なる境遇より解放する

三浦の徹底した個人主義・自由主義の白眉というべき文章であり、彼の思想を集約的に示している。後の石橋湛山に見られる戦闘的な姿勢もその原型がここに現れていると見ることもできよう。東洋経済を大正アモクラシーの拠点として位置付けたのはほんならぬ三浦であつたといつてできる。

三浦にまつわるエピソードには、社会主義者である片山潛を入社させたことがあるが、特に注目に値するのは、石橋湛山を育てたことである。石橋が東洋経済に入社したのは一九一一(明治四四)年の一月であつたが、彼は『東洋時論』の編集要員として採用されたのであり、彼を面接したのも三浦であつたといわれる。後に石橋は、三浦を「親とも兄とも申すべき」と表現したが、このことは彼の回想からも窺われよう。

「三浦氏のいない東洋経済新報社は、もちろん『東洋時論』を発刊することはしなかつたであろうし、したがつて私がこの社に世話をになることもなかつたであらう。(略)そして、そのことはまだ、大なり小なり、東洋経済新報社にはもちろん、世の中にも、異なる影響を与えたに違ひない」

『東洋時論』は、植松、三浦、片山、石橋の編集によつて成り立つてい<sup>(23)</sup>た。「論壇」欄には、社外の寄稿等が掲載され

た。登場人物には、大隈重信、安部磯雄、永井柳太郎、高田早苗、木下尚江などの、稲門関係者の名を見ることができる。扱われる領域は、評論、時論から文芸、歌謡にまで及んでいたが、一見総合雑誌のようでありながらも、やはり中心は編集部員の執筆による評論であった。

松尾によると、「『東洋時論』の特色は、市民的自由ないし個人主義を徹底して鼓吹した」ところにあるといふ。<sup>(24)</sup>個人主義と市民的自由とは、いわば一卵性双生児のような関係にあり、両者の徹底が帝国主義批判や小国思想に連携する。また、両者はミルが『自由論』をはじめとした主要著作において十分に展開した命題でもある。松尾は両者が『東洋時論』にどう発現しているかを仔細に検討している。以下、『東洋時論』のいくつかの記事を手がかりに、ミルの思想がどのように継承されているかを検討することとした。

### 3-3-3 「東洋時論」ヒミル思想の継承

#### 3-3-3-1 個人主義の徹底

松尾によれば、『東洋時論』の個人主義を旗印としたものは、「旧道徳とくに家族主義批判」に集約されるといふ。すなわち、天皇制の專制支配とその思想的支柱としての一切の封建道徳を克服し、政治的・市民的自由を完全に保障された市民社会の実現を図ることが、東洋経済新報社の理想であつた。<sup>(25)</sup>

の傾向に歯止めをかけ、そこから生じる害悪を食い止めようという意識が石橋の内部で強烈に働いていたに違いない。

一方で、この問題意識は一九世紀半ばミルによって危惧されていたものと共通するものがある。ミルの文脈に即して見るならば、彼は社会権力の増大は専制国家のようなる誰の目にも明らかなかたちで起こるのではなく、民主的な社会では「多数者の暴虐（tyranny of majority）」というかたちで起こる、といふ。それは世論という目に見えない力によって、人々の肉体には指一本触ることなく、人々の精神を束縛し、自由にものを考える力を奪ってしまう。こうした暴虐や圧制に対抗するには、人々が自由と理性とが人間にとつてどんなに必要であり、何ものにも代えがたい価値を持っているかを十分に理解し、そこから生じる人間的な自覚と勇気とをもつて行動することが重要だ、と考えたのであつた。そして、この認識がミルによる『自由論』執筆の最大の原動力となつたのである。

石橋をはじめとした天野の系譜を引く東洋経済の人々が、ミルの時代状況および思想を自らのそれに惹き付けて考えていたことは想像に難くない。このことは、彼らが早くからミルの研究会を持つていたことからも明らかである。では、彼らは以上の個人主義をより具体的にどう解釈していたのだろうか。旧道徳からの個人の解放を説く『東洋時論』は、特に婦人の解放に关心を寄せている。彼らにとって婦人問題は、

自由な市民社会の基礎となるのは、健全な個人主義である。個人が何ものによつても圧迫されず、各々の思想・良心に従つた言動が許される社会でなければ、いかに一見美しい装いをしていたところで自由な社会とはいえない。石橋は『東洋時論』の「文芸 教学」で次のように述べている。

「人が國家を形づくり国民として团结するのは、人類として、個人として、人間として生きるためである。決して国民として生きるために何でもない。宗教や文芸、あく独り人を人として生かしむるものであろう。人の形づくり、人の工夫する一切が、人を人として生かしむることを唯一の目的とするものである。(略)されば『国民として生きる前に人として生きねばならぬ』という言葉は、私の意味を以てすれば、『国民として生きる前』ばかりでなく、『宗教の中に生きる前』『文芸の中に生きる前』『哲学の中に生きる前』に人は人として生きねばならぬのである。否、生きざるを得ないのである」<sup>(26)</sup>

東洋経済で共有されていた個人主義の基本的な考え方をこの文章に見ることができる。人は個人として生きる、この一見当たり前の命題がどれほど力を持つことだろう。人は國家、社会、地域、企業、役所、いかなる集団の手段や道具であつてはならず、それ自身が価値あるものとして尊重されるべきである。推測するに、この文章が書かれた時代は個人を圧迫する社会の権力が不当に増大していたのだろう。こ

「今世紀最大の問題」であり、貴族に対する平民の覚醒、資本家に対する労働者の覚醒などの諸運動と軸を一にする、「人道発展の自然の命數」として把握されていた。<sup>(27)</sup>

石橋は、当時盛んに喧伝されていた、良妻賢母主義について次のような思想を表明している。

「良妻賢母主義といふものは實にそこぶる不徹底なる実用主義である。(略)そは全く過渡期の產物であつて、決して今日においてもなお採用せらるべき有効な主義ではない。今日においてもはや彼ら婦人をこの主義の桎梏から放つてやらねばならない。而して彼らをして今日の自由競争の社会に立つて推しも推されもせぬ一個人として生存して行けるようにしてやらねばならぬ。(略)我が社会の速やかに良妻賢母主義の教育を廃し、而して彼ら婦人をば一日も早く社会経済上の地位を自覺し、これに処するの途を講じ得るが如き者にする手段をとらんことを希望する者である」<sup>(28)</sup>

石橋はこの論文で、西洋流の個人主義と旧来の家族主義の折衷形態である良妻賢母主義を痛撃している。なぜなら、良妻賢母主義は本来不可能なことを要求するためだといふ。旧来の封建制のもとでは家長の男子に生活の保障があつたが、資本主義が進展しつつある社会にあつては、自由競争のなかで生活の資を見出す必要がある。このような状況では、婦人が夫を頼みにできず、妻である母であることを唯一無二の仕事とすることはきわめて困難である。むしろ、女性の自立を

促し、彼女らが自分たちの力で生計を立てていけるように、社会の仕組みを変えていくことが先決問題ではないか、と石橋はいうのである。

職業婦人を新時代における女性のあり方として捉え、理想の家庭はともに職業を持つ夫婦を単位として繋がるべきであると石橋は考える。今でこそこのような家族觀は是認されようが、彼の考えが当時の人々に奇異な印象を与えたことは想像に難くない。しかし、ここに旧来の家から女性を解放し、個として尊重されるためには、女性の経済的地位の安定が必要と考えた、石橋のきわめて実践的な感性を見ることができよう。

石橋の問題意識と直接関係があるかは議論の分かれることろだが、石橋の言説とミルが女性解放論者であり、女性の地位向上の急進的理論家であつたことが筆者には重なって見える。ミルは、思想家としての地位を固める過程で一貫してパトナリズム（親心的干渉主義）に反対している。<sup>30</sup> そして、ミルはこの立場から、『女性の解放』において、女性は男性によるその種の干渉からの解放を求めていると論じ、次のような指摘を行っている。

「男性は誰でも、自分自身が少年時代を脇したとき、愛し愛されてすらいるような年長者の後見と統制を脱して一人前の大人の責任を持つようになったとき、どのように感じたかを思い出してみるとよい。（略）以前よりも倍も生き生きと

した感じ、倍も人間らしい感じがしなかつたか。それでも男性は、女性にはそうした感情がないと考えるのだろうか」<sup>31</sup>

ミルは上記のような感情経験を踏まえて、個としての女性の地位向上を説く。また、その具体的な方策として女性参政権獲得を主唱した。ミルは「女性を単に女性であるという理由だけで選挙への参加から排除することは、正義の一般原理を侵害する」と述べているが、おそらく同様の思想は当時の東洋経済にもあつたのではないだろうか。なぜなら、先に述べたように、彼らの理想には封建道徳の克服、市民社会の実現があつたと考えられるためである。女性の権利を平等に実現できない社会は、男性にとっても有害な社会であり、市民的自由の実現はおぼつかないであろう。（以下、次号に掲載）

### 【注】

- (1) 関根彌彦「ベンサムとミルの社会思想」『世界の名著49』中央公論社、一九七九年。
- (2) 丸山眞男「『文明論の概略』を読む」（第四講）『丸山眞男集』（第13巻）岩波書店、一九九六年。「自由は多事争論の中に生ず」は福沢の基本命題の一つであり、彼の思想に与えたミルの影響の程度を窺うことができる。
- (3) 関、前掲書。
- (4) 中村尚美『大隈重信』吉川弘文館、一九六一年。「予は朝にあるも野にあるも主義とするところは即ち一なり」という言葉は、彼の当時の心境をよく表している。
- (5) 早稲田大学大学史編集所編『早稲田大学百年史』早稲田大学出版部、一九七八年。
- (6) 同書。
- (7) 同書。
- (8) 浅川栄次郎・西田長寿『天野為之』東業之日本社、一九五〇年。
- (9) ミルによる功利の概念内容は、必ずしも單純なものではない。ミルはある快樂が他の快樂よりも一層豊ましく、価値あるという事實を認め、この点を功利の原理に適用している。すなわち、より高尚な快樂というものが存在し、その獲得に向かつて自己陶冶していく点にミルの特質がある。
- (10) 浅川・西田、前掲書。
- (11) 三浦鎮太郎「天野為之先生を偲ぶ」松尾尊允編『大日本主義か小日本主義か（三浦鎮太郎論説集）』東洋経済新報社、一九九五年。
- (12) 天野為之「余の経営時代」『東洋経済新報』第一一七四号。浅川栄次郎・西田長寿『天野為之』東業之日本社、一九五〇年より。
- (13) 『東洋経済新報』第五四号。
- (14) 岡田純一「経済政策論（天野為之）」『近代日本と早稲田の思想群像』早稲田大学出版部、一九八三年。
- (15) 浅川・西田、前掲書。
- (16) 『東洋経済新報』第二七号。
- (17) 「出征兵士の待遇」『石橋湛山全集』（第八巻）東洋経済新報社、一九七一年。
- (18) 田中彰『小国主義』岩波新書、一九九九年。
- (19) 石橋湛山『湛山回想』岩波文庫、一九五一年。
- (20) 松尾尊允「急進的自由主義の成立過程」井上清・渡部徹編『大正期の急進的自由主義』東洋経済新報社、一九七二年。松尾は「今世紀にはいつから日露戦争開始までの『東洋経済新報』の社説を通観して、まず気のつくことは、政治問題を直接扱つたものがはなはだ少ないのである」と指摘し、初期の東洋経済が、自由貿易主義の主張等、経済分野を中心としており、政治の分野で十分に展開されなかつたことを述べている。『東洋時論』刊行の背後には、政治と経済をそれぞれ分離したものなく、一体として論じることへの必要性があつたと考えられる。
- (21) 三浦、前掲書。
- (22) 石橋、前掲書。
- (23) いすれも東京専門学校と関わりを持つ人物であるところは注目に値する（植松、三浦、石橋は卒業生、片山は一時講師をしていた）。ここに当時の学問と言論との命脈の深さと自由主義思想における理論と実践が両輪として機能していた状況を見ることができる。
- (24) 松尾、前掲書。
- (25) 同書。
- (26) 「国家と宗教および文芸」『東洋時論』明治四五年五月号。
- (27) 杉原四郎『J・S・ミルと現代』岩波書店、一九九四年。
- (28) 松尾、前掲書。
- (29) 「維新後婦人に対する概念の変遷」『東洋時論』大正元年一〇月号。
- (30) 関口正司『自由と陶冶』みすず書房、一九八九年。
- (31) J・S・ミル／西本正美訳『ミル自伝』岩波文庫、一九一八年。